



託麻原の戦い

物騒な小見出しですが、この戦いは歴史上の戦いのことです。この戦いを記したものが水前寺競技場の駐車場に「天授勤王戦跡(てんじゅきんのうせんせき)」の碑が建っています。この石碑は、天授4(1378)年にこの付近一帯が「託麻原の戦い」の舞台であったことを伝えています。この時代は、南北朝時代で、南朝方(天皇派)と北朝方(武士派)がこの託麻原でも戦ったのです。南朝と北朝との対立は、北朝方が優勢で、北朝方の足利尊氏は征夷大將軍となり、京都に室町幕府を開いていました。天授4年(1378年)9月29日の朝焼けの霧のまだ晴れやらぬ時、今川了俊(いまがわりょうしゅん)率いる北朝軍と、菊池武朝(きくち たけとも)率いる南朝軍との戦いの火蓋が切られました。この戦いで南朝方の総大将は、菊池武朝でまだ16歳の若武者でした。このとき菊池家の家紋である「並び鷹の羽」の旗を押し立てて必死で戦いました。菊池武朝も負傷するほどの激しい戦いでしたが、この時、健軍宮(たけみやぐう)から、後征西將軍良成親王(のちのせいせいしょうぐんよしなりしんのう)が、颯爽と姿を現し、その雄姿に南朝軍の士気は一気に高まりました。そして今川軍を肥前へと退却させ、菊池勢が勝利をおさめました。しかし、この託麻原の戦が南朝最後の勝利となり、その後、南朝が北朝に吸収され、室町將軍家による全国統一が完成しました。



気になる武朝の去就ですが、南北朝の合一後、かつての宿敵今川了俊の手により、改めて武朝が、肥後守護に任命されたということです。これは、敵方から見ても、肥後における菊池氏の功績を無視することは出来なかったということを示しています。帯西校歌2番の「鷹の羽の旗の凛々しさ」は、誇り高いものの象徴なのです。

因みに「天授勤王戦跡」の文字は、明治のジャーナリスト徳富蘇峰の筆になります。そして、塔の両脇のリレーフには、武朝と良成親王らの奮戦の様子が彫られています。

すてきな歌声が響いた「にぎわい祭り」

27日(日)水まち水前寺実行委員会が主催で帯西まちづくりの会が協賛されているにぎわい祭りがありました。本校からは、合唱部が祭りに参加し、「一番はじめは」「もみじ」「まっかな秋」三曲を歌いました。季節の歌に、少し暑かった会場にも秋の風が吹いたように感じました。紫のTシャツを着て堂々と元気いっぱいの歌声を公園に響かせ、多くの観客の方が聞き入っておられました。仮装し来場していた低学年や高学年も、「素敵な歌声でした。みんなに聞かせたいです」と言っていました。6年生の立派なアナウンスにも、観客の皆さんから大きな拍手が送られ、祭りを縁に集った人々の温かさにもふれたひと時でした。

